

## B 比爪館跡と周辺の文化

### 北の拠点・比爪館

#### B② 比爪館とは

比爪館跡は、北上盆地を南北に貫流する北上川右岸に位置し、西部には奥羽山脈東麓を走る奥大道・安倍道、東部には北上高地西麓を走るあづま海道（東街道）など東西の往古古道を基軸とした水陸交通の要衝の地にあった。かつて出羽国雄勝地方から奥羽山脈の峠越えの道は、出羽国と陸奥国を結ぶ重要な交通路とされていた。

比爪館跡は、平泉藤原氏の一門である樋爪氏が、平泉藤原氏の北方支配の最前線として造営した平安時代（12世紀）の館址である。その遺構は、赤石小学校の敷地を含む東西約300m、南北約200m、約5万㎡近い広さを持つ不整形の方形の遺跡である。その区画は、五郎沼のある南端を除く東・西・北の三方が幅10m前後、深さ約12mの大溝で囲郭されているが、防御機能はさほど重視されていないとすることから、権威や象徴性を強調した館と考えられる。

比爪館跡の発掘調査は、昭和40年代から区画内の北西部（赤石小学校周辺）を中心に逐次行われてきた。区画北西部は身舎（本屋）桁行10尺と推定される四面廂建物が確認され、館の主殿級建物が配置された区域とみられている。また、総柱建物や仏堂とみられる宝形造建物、厠状遺構、井戸跡などが検出されている。遺物として12世紀前葉から後葉のかわらけ、常滑焼・渥美焼・珠洲焼などの国産陶器、中国産磁器、土師器、須恵器、仏器、鉄製品、墨書土器、木簡、漆椀、箸、曲げ物、下駄などの木製品などが多量に発見された。この遺跡は、『吾妻鏡』に記される「比爪館」の跡と考えられ、昭和50年3月25日に紫波町指定史跡（指定名称は「樋爪館跡」）となった。

大溝や濠で囲郭された四面廂建物の存在や大量のかわらけ、陶磁器の出土は、ここが武士の居館であったことを示している。比爪館跡は、12世紀の遺構・遺物のほかに、平安時代前半（9世紀後葉～10世紀前葉）の竪穴住居や土師器・須恵器や14～15世紀と推定される建物跡が検出されている。複数時期の遺跡が重なる複合遺跡であることは、樋爪氏に代わってこの地を支配した斯波氏に関連する居館が存在した可能性を示唆している。

近年、比爪館跡は、考古学的知見が蓄積され研究が進展している。この比爪館跡の北方から東方には、北日詰東ノ坊Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡、大日堂遺跡、南日詰大銀Ⅰ・Ⅱ遺跡、南日詰小路口Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡など、12世紀の遺物を出土する遺跡が濃密に分布する。

比爪館の東側に位置する南日詰小路口Ⅰ・Ⅱ遺跡の発掘調査では、12世紀の大規模な区画溝と直線的な道路遺構が検出されており、都市的な空間と推測されている。さらに南日詰大銀Ⅱ遺跡では、堀跡、三面廂掘立柱建物跡、幅60cmの堀跡、土坑跡、柱穴跡などの遺構や中国産の黄釉陶器盤、常滑産陶器、中国産陶磁器、鉄製品などの遺物が検出されている。

黄釉陶器盤は、県内では平泉柳之御所遺跡で確認されているだけである。堀跡は幅60cmもある巨大・強固な造作である。これらから、比爪館に関連する重要人物の居館であった可能性が示唆されている。